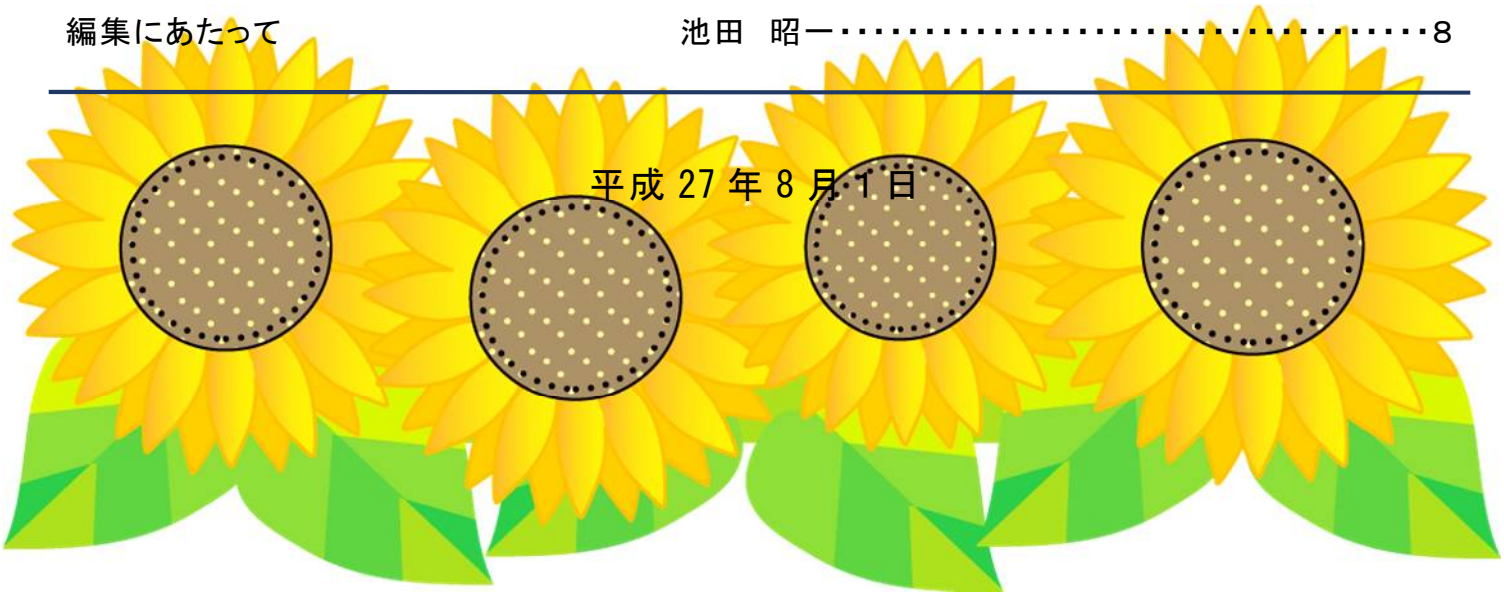
シビルまちづくりステーション　会報　第10号

目次

発行にあたって　比奈地　信雄……1

1．26年度総会議事　花村　義久……2
2．液状化対策プロジェクトを終えて　池畑　輝男……6
3．橋百選番外編／貨幣の図案となった橋　日浦　明……7

編集にあたって　池田　昭一……8



平成 27 年 8 月 1 日

発行にあたって

比奈地　信雄

私はシビルまちづくりステーションの活動に参加して十年余りになります。65歳になり、そろそろ現役を引退し、何か地域に役立つ事に関わりたいなと考えている時期に花村理事長からお声がかかり、当NPOに入れて貰いました。当時土木事業がとかく世間の非難を浴びており、何とか土木事業の有益性を一般の人々に説明し理解してほしいと考えておりました。長年土木事業に携わって来た者にとっては、切ない思いがしておりました。明治以来、土木事業は行政が企画、計画し建設して、住民に与えられるものという考えが一般化しており、具体的な内容に関与できないのが当たり前と思われておりました。しかし世の中が豊かになり、個人個人の考え方が多様化し、ただインフラストラクチャーを造ればよいという時代ではなくなり始めていました。造られた施設と住民の要望に誤差が生じ、その不満が増大していった時代でした。行政サイドでも住民の考え方を取り入れた社会基盤整備を進めなければいけないと、各種の施策を考えるようになりました。当NPOにおいても合意形成についての検討チームを作り勉強しましたが、どのような形で考えを纏めるのかが曖昧のままで活動が終結してしまいました。市民の立場で土木構造物を考える活動は、今後も必要だと思っております。数年前より我々のNPOで取り組んだ液状化対策や土砂災害プロジェクトの活動は、市民への情報提供として相応(ふさわ)しい活動と考えます。液状化対策のパンフレット作成や講習会を通して市民との接し方、行政とのかかわり方、技術を解り易く伝える方法等、色々の事が勉強出来たと考えます。またこの活動により何がしか地域に役立つ活動が出来たのではないか、と自負しております。長年、色々な立場で技術的業務に携わって来た経験豊かな技術集団の力を発揮した事例と思います。

これからもこの特性を生かし、一般市民に土木事業を解り易く説明するとともに、その実施に際しては市民の立場に立って計画時から地域の要望を取り入れた事業になるよう提案する活動をすべきであると考えます。ここ数年で新しいメンバーの参加があり、より活動の範囲が広がってきました。NPOの活動の原動力は構成メンバーのパワーが基本になります。今までの会員の力だけではなく、新しいメンバーの参加を募り、より大きなパワーで社会に貢献できるNPOに発展していきましょう。

1．26年度総会議事　　花村　義久

平成27年度通常総会が5月26日千代田区和泉橋区民館で開催されました。議事はいつもの通り、平成26年度の活動経過報告、会計報告、平成27年度の事業計画、そして予算の審議・決定です。終了後、特別映写会と懇親会が行われました。

まずは、平成26年度の経過を追ってみます。詳しくは、本会報で関係の方が述べられると思います。主な事業内容は、市民参加・市民協働によるまちづくりと連携の推進・支援、緑化・芝生化の推進、出前講座・講演・指導、防災活動と液状化対策活動です。具体的な活動の経過は、次のとおりです。

1．市民参加・市民協働によるまちづくりと連携の推進・支援

1）市民参加・市民協働による地域活動

船橋市において、行政・市民との連携を図るため市民活動推進イベントへの参加などを行いました。また、横浜市における都市計画道路の見直しに対し、市民の立場で提案を行いました。

2）橋百選

昨年に引き続き、U＆C（㈱フォーラムエイト広報誌）への掲載を、岩手、石川、山口の各県順（第27～29回）に行い、そこでは各地域会員の参加・協力を頂きました。なお、第30回では「世界の吊橋」の特集を行いました。フォーラムエイトの広報誌は内容が多岐にわたるレベルの高いものですが、その中にあって読者アンケーでは橋百選はトップの人気でした。

橋百選　掲載第30回記念　世界の吊橋より

3）NPO法人シビルNPO連携プラットフォーム（CNCP）

当NPOが建設分野の連携推進の立場から力を入れて来た土木学会・建設系NPO連絡協議会は、8月に中間支援組織の「NPO法人シビルNPO連携プラットフォーム」（CNCP）として発展し、当NPOも積極的に参加することになりました。

2．緑化・芝生化の推進

本活動は、校庭・園庭の芝生化の活動を教育環境改善や地域コミュニティの推進の立場に立って行っています。西日本地区では、大阪府をはじめ奈良、兵庫、和歌山県などで芝生化事業を幅広く実施し評価を得ていますが、本年度は維持管理の仕事が増え、これに対する技術の確立、運営体制固めが必要になりました。関東地区でも、船橋市の御滝中学校や佐倉市の吉見光の子保育園で芝生化を進めました。

3．出前講座、講演、指導

今まで内部のセミナーを通じて基礎固めをしていた出前講座、講演、指導については、昨年度は本来の対外的な活動として若干の進展がみられました。

具体的には、公民館からの依頼による防災講座を、液状化対策プロジェクトでまとめた「地震による液状化対策に備えよう」などのパンフレットを活用して行いました。

また、芝生化事業については、多数の実施例による調査研究や具体的な事例をもとに、地方自治体や学校等で講演会や指導会を実施しました。

4. 防災活動と液状化対策活動

1）液状化対策プロジェクト

液状化と液状化災害の減災に関する調査・研究を行いながら、その関係者が共通認識を持ち、液状化災害の減災に向けて自治体・地域住民へ情報・知見の提供を行うとともに、関係機関に提言を行いました。また、前年度に引続き船橋市市民公益活動公募型支援事業の助成金を受け、災害の実態調査・分析などを実施しました。この調査から新たなものが見えて来たのも収穫でした。

液状化実態調査結果発表セミナー　液状化模擬実演

2）防災支援活動

液状化問題を核にして、地域における防災活動を支援しました。また、宮城県での東日本大震災復旧の支援、大阪市北区での防災訓練の企画・運営協力、豪雨災害地（兵庫県丹波市、京都府福知山市）での災害ボランティア活動などを実施しました。

5. 情報活動その他

1）情報提供

ホームページ、ブログ、フェイスブックなどを通じて、防災・災害支援、まちづくり、公共事業などに関する情報提供を行いました。また、会報第8・9号を発行しました。

2）体制

運営体制を固めるべく各種マニュアルを作成し、内規の整備が進められました。

平成27年度の活動は基本的には昨年度と同じで、大きくは次の4項目となりました。

（Ⅰ）市民参加・市民協働によるまちづくりと連携の推進・支援

（Ⅱ）緑化・芝生化の推進

（Ⅲ）出前講座・講演・指導

（Ⅳ）防災活動と自然災害対策活動

実施に当たって、具体的には次のような内容となっています。

1. 市民参加、まちづくり

1）市民参加・市民協働による地域活動

創立以来進めてきた合意形成・市民参加に対し、さらに地域の状況に合い密着した活動を定着させる。行政、市民団体、企業、市民との連携を強化するとともに組織内の連携も強化することにしました。

2）橋百選

U＆C掲載を、愛媛、長崎、福島、新潟各県順に引き続き行います。ここでは、各地域会員の参加・協力のもとに実施する予定です。

3）建設系NPO、中間支援組織との連携

土木学会発の「シビルNPO連携プラットフォーム」と、建設、まちづくりを活動の主体とする当NPOとの連携は有効であり、今後いろいろな部会に参加するなどその関係を深めるべきです。また、各地域のメンバーも連携をもって活動するのが好ましいと考えます。

2. 緑化・芝生化の推進

当NPOの技術、ノーハウ、実績を活かして、今年度も校庭・園庭の芝生化を教育環境改善や地域コミュ

ニティの推進の立場に立って実施します。また、可能な限り全国展開を行なう方針です。新規の開拓とともに維持管理の技術の開発、体制の確立に努め、そのための車や機器の購入など設備投資もすることになりました。なお、関東では佐倉市ユーカリが丘で新たに保育園、児童センターが加わることになりました。

佐倉市ユーカリが丘　光の子児童センター　（千葉県保健医療大学学生参加）

3. 出前講座・講演・指導

1）出前講座

対外的な出前講座は、従来の個人でのサービスを中心とする考えを2次的とし、組織が持つスキルを生かした形を基本とすることにしました。

2）内部のセミナー

CMSセミナーは従来通り行い、組織のレベルアップ、活性化を図ることにします。

4. 防災活動と自然災害対策活動

従来の液状化対策を土砂災害も含めて自然災害として捉え、対応の幅を広げることにしました。

1）土砂災害対策

土砂災害対策の事業を、船橋市をフィージビリティースタディとして、船橋市市民公益活動公募型支援事業を受けて実施します。また、船橋市が音頭を取る夏のボランティア体験イベントに、中、高、大学生を対象とした「自然にひそむ危険発見隊」という企画として、当ＮＰＯも参加することにしました。

夏のボランティア体験　シビルまちづくりステーション申込みブース

2）液状化対策

液状化対策プロジェクト設立来の成果を生かし、東京湾岸等広域を対象とした活動など、新たな活動の可能性を探ることにしました。

3）防災支援活動

地震・液状化・土砂災害等自然災害問題を核に、地域における防災活動を支援します。また、関係自治体や他団体との連携のもと、建設技術の立場およびNPOの立場から、防災を基軸とした新たなまちづくりの調査、計画、提案などを行い、具体的な事業を行いたいと考えています。

5. 情報提供・教育活動

1）情報提供

ホームページ、SNSなどを通じて、まちづくり、公共事業などに関する情報提供を行います。また、内部の運営にもその力を生かし、特に地域の会員相互のコミュニケーション促進に活用します。

2）教育

当NPOの日常の活動に関連した内容をセミナーとして内外に対して行う予定です。

6. 体制・運営

組織としての運営の体制を確立すべく昨年に引き続き、内規の整備を行い、特に会計については経営的視点から財務管理が出来るようにします。また、活動方法や会議の運営方法の改善、会報の強化等により組織の活性化、特に地域活動の充実を図りたいと考えています。

今年度は以上の活動方針で進むことになりましたが、議論の中では新たな事業に取り組むなどより積極的な方針を打ち出すべきだと云う建設的な意見も出され、今後議論を進めることになりました。その中で、今後のNPOには、経営、事業、財務などを重視した運営が必要であるとの指摘がなされました。これも今後真剣に取り組むべき課題です。

最近徐々に専門知識を持った方が入会され活動が充実して来ています。より事業を発展させるには、更なる会員の増加と組織力の強化が求められています。

今年度は役員の改選はありませんでした。次年度は、新たな体制で更なる発展を期待するものです。

2. 液状化対策プロジェクトを終えて　　池　畑　輝　男

液状化対策プロジェクトは、平成23年3月11日に発災した東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）による液状化により、東京湾岸の海域を埋め立て造成された住宅地や内陸部において旧河道の沼を埋め立て造成された住宅地、そして宮城県気仙沼市、女川町海岸造成地での津波と液状化による住宅被害ほか道路などの都市インフラ、上下水道などのライフラインなどに甚大な被害をもたらしました。

当NPOは、震災後 4 月初旬から7月にかけて千葉県浦安市や船橋市、宮城県気仙沼市、女川町の災害調査（その他会員独自で千葉県我孫子市、埼玉県久喜市など）を行い、当NPOとして活動がしやすい地域として東京湾岸における液状化災害について、広報活動・提言を通じて地域に貢献することを決め、運営委員会に活動の企画書を提案して承認を頂き、液状化対策プロジェクトを立ち上げ、当NPO全会員に参加募集をメールで呼びかけ 8 人（会員 7 人、一般 1 人）の参加者により平成 23 年 12 月液状化対策プロジェクトを設立し、活動の目的、

①「液状化による被害収集・液状化対策」、②「液状化被害の備え「災害への備え」「減災」に関する土地利用等の法令条例、③「ハザードマップ及び以外の土地造成区域の住民に「災害への備え」「減災」のパンフレット作成」の3項目について検討しその成果の活用として「参加会員のスキルアップと地域住民へのセミナー—」、「土地造成による液状化による災害防止について自治体、関係機関への提言」を骨子して会議を重ね、具現化するためモデル市として千葉県船橋市（在住会員が多い）を決定し、住民に近い実施チームにするため「船橋防災関連プロジェクトチーム」（会長花村さん、責任者廣田さん）を設立し市民活動団体として登録して平成 24 年 11 月に平成25年度船橋市民公益活動公募型支援事業応募して採択され、地震液状化に備える広報パンフレット作成・配布、地震防災フォーラム in 船橋,地震防災セミナー—、サマリノート作成・配布により、地震による液状化被害を少なくするため、住民の方々に地震によって起こる地盤の液状化について理解して頂くことが重要でとの賢智から、液状化についての諸課題等と、きっかけ喚起を進めてきました。

平成 26 年度も引き続き船橋市民公益活動公募型支援事業応募して採択され、船橋市役所の液状化災害箇所の資料（住宅、道路、下水道等）の提供を頂き図面上に転記した災害マップを作成して市域における発生状況を把握し、市が公表している地震液状化ハザードマップと照合して見ると大きな相違があり、これらを基に船橋市と共催で地震防災セミナー—を開催して住民の皆様に液状化災害が広い範囲で発生していることを説明し大変好評をいただきました。

液状化被害に対し立ち上げた液状化対策プロジェクトは、モデルとして活動した船橋市から湾岸地域の関係自治対へと広報することや、土地造成（埋め立て、谷埋を含む）による液状化災害の減災、防災に向けての関係機関への提言（対策、法令、条例など）など残し諸般の事情により平成 27年 4 月をもって液状化対策プロジェクトを解消いたしました。

私も平成 26 年2月に交通事故に遭い体調を壊し平成26年度は活動の停滞を招き迷惑をかけ、液状化対策プロジェクト並びに船橋防災関連プロジェクトチームの皆様には3年4か月余大変お世話になりありがとうございました。

今後は、機会を見て地震による液状化のセミナー—や出前講座と合わせて、狭い国土でどう自然災害と向き合い安心して住める地域づくり（街づくり）の在り方について、土地利用（都市計画としての）面から考えることも一考であると思います。

液状化による基礎の
液状化噴砂
（千葉県浦安市　）

液状化による基礎の
摩擦解消により倒壊
（　宮城県女川町）

3.「橋百選：番外編」貨幣の図案となった橋

橋百選担当　日浦　明

A ユーロ紙幣

ギリシャの債務不履行（デフォルト）懸念により世界の金融市場には混乱が広がっていますが、ユーロ紙幣全ての裏面に橋がデザインされているのをご存知ですか。その理由は定かではありませんが、書物に拠れば、描かれた建造物は、ヨーロッパにある歴史的な橋や門に普遍的な要素を合成し、各時代の建築様式を表現した架空のものと記されています。橋好き男としては欧州連合（EU）加盟国の強固な絆の象徴として【橋】が最も相応しいと考えられた結果と解しています。皆さんはどうお思いでしょうか・？・

B カンボジア 500 リエル紙幣（本橋の建設に関与された元本四公団大島久氏提供）

カンボジアの 500 リエル紙幣の裏面には、我が国とカンボジアの友好のシンボルとして、無償資金援助で完成したメコン河に架かる「KIZUNA 橋」が描かれています。表面はカンボジア国民の心の拠り所である「アンコールワット」が描かれています。この「KIZUNA 橋」はメコン河で分断されていた国道 7 号線を結ぶ重要な交通手段として、メコン河に架けられた初めての橋であり、国民悲願の橋でもあります。現地では「キズナ橋」と日本語の愛称で呼ばれ、大切にされ、シンボルとなってています。

C スコットランド 20 ポンド紙幣

Forth 鉄道橋は、英国のゲルバーが考案したカンチレバー理論を具現化した偉大な作品と云われています。完成は 1890 年で、使用鋼材は 54000t に達し、製作架設には、5 千人が毎日昼夜兼行で働き、7 年を要しました。19 世紀末の大英帝国の技術の結集としてその威容が 1 ポンド硬貨、そしてスコットランド銀行が発行している 20 ポンド紙幣に描かれています。この歴史的な橋を参考に、我が国では大阪港に架かる「南港大橋」が建設されました。（田中五郎博士投稿の技術誌から）

D ベトナム 2 万ドン紙幣

ベトナム中部の港町ホイアンはその古い町並みが世界遺産に登録されています。その中にある日本橋は、その昔、ルソン助左衛門の時代だそうですが、日本人よって、日本人街と中国人街を結ぶ屋根付の橋として、架けられたと伝えられています。地元民に愛されている橋が紙幣の採り入れている。この紙幣《2 万ドン》で缶ビールが 1 本しか飲めない嘆きのレポートでした。

※紙幣撮影＆レポート：ベトナムにて活躍中の鳶職＝M 氏から提供です。

※特記：紙幣の撮影、スキャナーは法に抵触する等の問題がありますが、種々制約を考慮し編集しました。
特に当レポートを印刷することは、殆どのプリンター機器が操作不可です。パソコン上でお楽しみ下さい。

編集にあたって

池田昭一

６月の通常総会も終わり、皆様には新たな気持ちで活動を始められていることと思います。

さて、私は山によく登ります。そこで感じたことの一つに治山・治水対策があります。川の上流にある幾層にも重なった砂防ダムを見ると、そのための道を作り森を切り拓くことは別にしても、土砂や倒木が堆積しダムの用途も成していないような箇所も多く見受けられ、逆に土砂災害の遠因ともなるような危険もあるようにも思えます。何故、土砂や倒木、崩落してきた岩石などが溜まるかといえば、山の治水能力が落ちているからであり、それを力で押し止めようとすることに矢張り、無理が生じているように思えます。

先日、「土木遺産　日本編」という本を読んでいましたら、福井県南越前町「アカタン砂防」（以下、アカタン）、長野県松本市「牛伏川フランス式階段工」（同、牛伏川階段工）が載っていました。アカタンは九頭竜川水系の急流赤谷川の災害対策のため、１９００（明治３３）年～１９０６年に造られた砂防堰堤群であり、現場の地形に配慮し、上流部では谷の浸食を食い止め、下流部では堆積物の流化を防ぐ対策を講じています。また、牛伏川階段工は信濃川水系のなかでも急峻で名高く、山の荒廃（一帯は「大化け」と呼ばれていた）も加わり土砂災害が頻発していた牛伏川の災害対策のため、１８８５（明治１８）～１９１８年の長期に亘り行われた堰堤の築造、川底の復旧、流路の改修などであり、植林も同時に行われました。特に下流部に造られた階段式の水路は設計者がフランスの例を参考にしたことから「フランス式階段工」として、日本で最も美しい砂防施設と称されています。

いずれも、明治時代に荒廃した赤谷川、牛伏川復旧のため多大な経費をかけた難工事の末完成した砂防工事で、現在では自然に溶け込んだ景観の一部と化しています。なかでもアカタンは、築造後、いつの間にか自然のなかに埋もれ、忘れられていましたが、地元有志による調査により１９９８（平成１０）年、１００年以上経って再発見されました。このように忘れられた理由としては、防災対策が功を奏し災害が発生しなかったこと、豪雪地帯で雪に埋もれている期間が長いことなどが挙げられています。

これらの構造物が何故、自然と一体化しているといえば、いずれも水系・地形に配慮し、流路の分散・階段化を図る（牛伏川階段工では森林の回復も図られた）など、力で抑え込むのではなく自然の力を活かした対策の結果といえそうです。古来からの、日本人の自然を活かしながら治めるという「先人の知恵」に基づいた土木構造物のあり方に還ることが、「遺産」を生み出すことになったのではないでしょうか。

という訳で、山を歩いていると、いろいろ考えさせられることもあります。

発行者　NPO 法人シビルまちづくりステーション

東京都豊島区南池袋 2-12-5 第 3 中野ビル４F
ＴＥＬ 03-3987-6646 FAX 03-3989-0062 Ｅメール info@itstation.jp
ホームページ http://www.itstation.jp